笑顔

石川　良輔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
笑顔

【Ｎコード】
Ｎ９１３７Ｃ

【作者名】
石川　良輔

【あらすじ】
短編小説なんでそんなに時間はかからないと思うんで読んでみてください！

女の子なんていらない。
そう初めて考えたとき薄手のシャツで少し肌寒く感じた。その頃はまだこの町のそこらじゅうで新しい気力が満ち溢れていたので四月頃であったろうか。
私はその日もこなさねばならない日課のために二月堂と呼ばれる建物に向かった。二月堂はこの高校の合宿所として建てられたらしいが、もっときれいで立派な合宿施設が作られてからはほとんどの学生の生活からは忘れられているのであった。二階建てで一階には集会場や教師用と思われる畳の部屋、浴室、トイレ、玄関などがあり、二階は７０人くらいの生徒が寝られるくらいの絨毯の大きな部屋があるだけだ。二月堂はいつの間にかそう呼ばれていて本当の名前が分かる者はいないであろう。二月に建てられたから二月堂といわれるのであろうか。名前ですら関心がないのだからほとんどの学生はそこを訪れることがなかった。入学当初、私はこの建物に入ったときのなんとも言えない雰囲気が好きで日課の場所に決めたのであったが、２年も通っていると何も感じなくなっしまうものである。しかし忘れた頃に急にそのようなものを感じるので懐かしいような思いがする。今はむしろ一瞬咲いたその花を摘むことが私とそれをつなぎ止めている数少ないものの貴重な一つであると思っているのだ。
私の日課とは放課後に仲間で絵を描くことであった。絵といってもスケッチとかデッサンとかではなく漫画であった。それを１ヵ月に一度そこそこの知名度の雑誌に投稿する程度である。そこではすでに３人の仲間が作業を始めていた。私たちは一人一人で作品を作るのではなく５人で一つの作品を仕上げることになっていたので２日ほど前に決まった「企画書」に基づいて作業が行われていた。私も急いでるように荷物を置き準備をして紙に向かった。程なくして

残りの1人も現れた。
　当然授業が終わったあとから部活が始まるので2時間も作業ができない。作業場には壊しがたい空気が張りつめている。投稿日を考えたら仕方ないことであるが、それでも私は気の置けない彼らと夕暮れの一時を過ごせることに喜びを感じているのであった。
　二月堂は元は合宿所なので古いという点を除けば快適である。しかし学生の中ではいのがかなり大きなマイナスポイントで近寄りがたいものになっているという。そのめったに音をたてない玄関の扉の音が聞こえたのは突然だった。その音と同時に「すみません」というかなり低い声が届いた。私は不思議がりつつも期待に胸を膨らませ階段を降りていった。そこには学ランを着たひとりの少年が緊張した顔で立っていた。声の割に顔は幼く、制服に合わないその顔はかわいらしかった。
「あの…ここでは漫画を描いてるんですか？」
「…君は誰だい？」
彼の白く柔らかそうな頬が少し赤みを帯びた。
「僕…1年の中田です。中田清っていいます。」
「中田くんかぁ。どうしたの？」
「え～と…」
彼は一瞬言葉を探してから
「入部ってできますか？」
と言った。語尾の方は少し聞き取りづらかった。
「うーん…」
と私は迷った末、
「やめた方が良いと思うけど…」
と静かに言った。
「なぜですか？」
彼の声はやはり低かった。
「どうしてこの部活に入りたいの？」
「それは…漫画が好きだからです。それ以外にはありません。」

「うーん…そっか。一人でもいいの？」
「それは…。でも好きなことが出きるなら構いません。」
「でも一人じゃなぁ…大変だよ？」
清は少し狼狽した表情になったが、それを悟られないようにか強めの語気で私に尋ねてきた。
「友達とじゃなきゃいけないんですか？」
「別にそういうわけじゃないけど…嫌いになっちゃうよ、漫画」
その理由を聞かれて何と言って良いのか悩んでいる私にきづいたのか、清が口を開いた。
「僕、一人でも大丈夫です。」
清はやる気と希望に満ちていた。私は2年前の私を清に見ていた。
「そうか。その気持ちは絶対なんだね？」
彼は少し微笑み「はい」と言った。私はその笑顔にいままで味わったことない
爽やかな気持ちを抱いた。清の入部を両手を広げて歓迎したかったが、
「よく考えて明日また来てよ。今日は遅いし。」と私も微笑み言った。
清は最高の笑顔で「ありがとうございます」と言ってくれた。私は出来れば清
とは部活以外で関わりたかったと思った。彼は「さよなら」と軽くお辞儀をして校舎の方に歩いていった。私は胸元で小さく手を振っていた。暮れなずみの空が僕らを見ている。少し冷たい風が私を醒ました。

（後書き）

読んでいただきありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9137c/

笑顔

2011年1月5日23時10分発行